



■みなとみらい21地区のタワーマンション、海拔100mのリビング。21世紀ヨコハマを象徴する眺望



■磯子、築72年の洋館付き住宅。戦前の磯子は海に臨み、関内の成功者などが別邸や妾宅を建てた、色っほい町だった

YOKOHAMA FREESTYLE

その、奔放、かつ、スタイルがある、住宅と生活

構成 | TOKO
edit by TOKO

撮影 | TAKI
photo by TAKI

style_01

住宅は、生活アミューズメント施設であるべきだ
本牧の"BOAT HOUSE" 建築家・滝本学氏の自邸

style_02

ウィークデイ・バチエラー
COO・後藤元信氏は、みなとみらい超高層マンションに、平日単身赴任

style_03

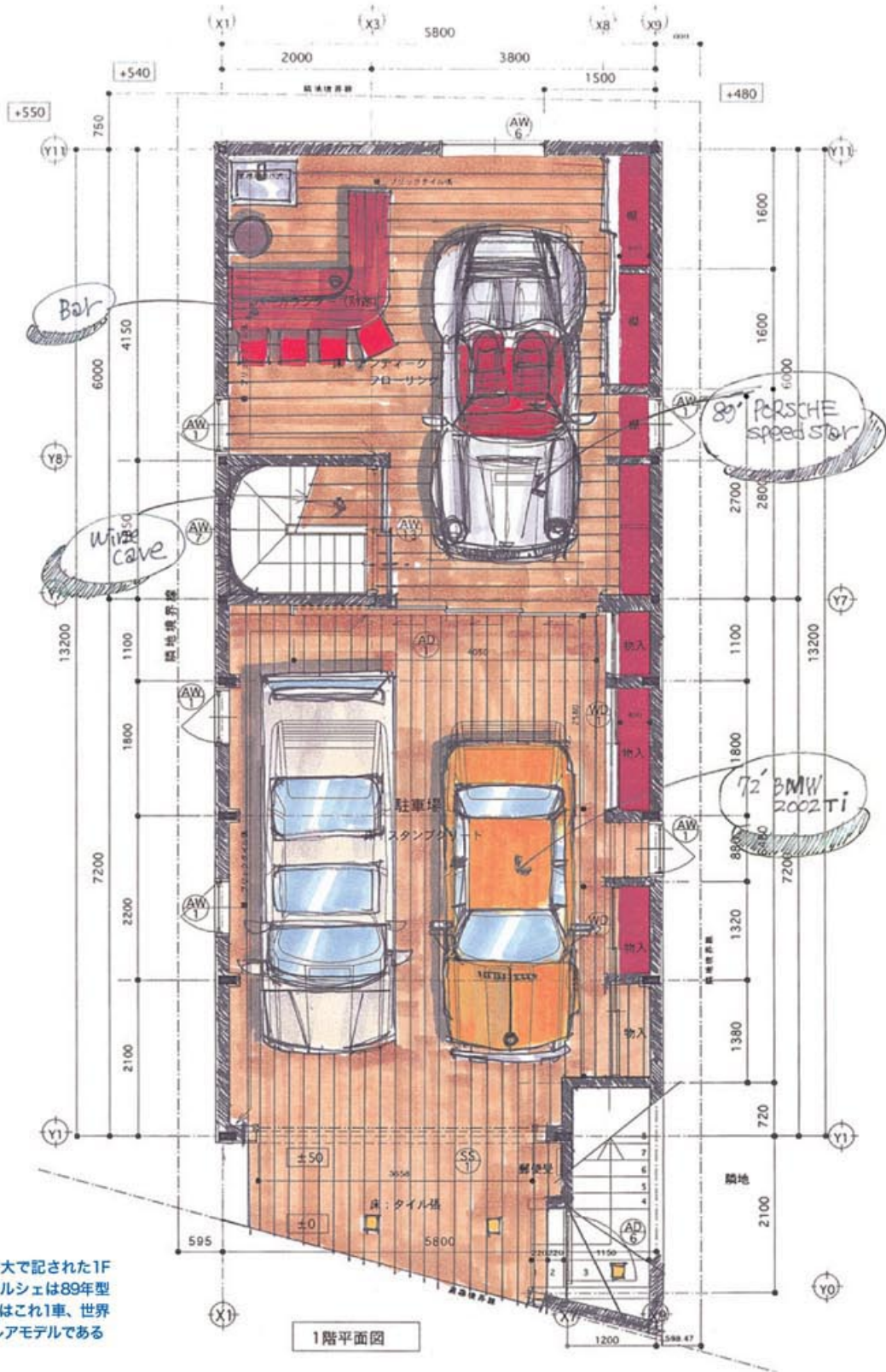
「100年住宅」は横濱に、じつはすでに多数現存している
築72年。磯子の洋館付き住宅を再生する

style_04

海を望んで深呼吸する中区の丘の家
クリエイター小林氏邸はいかにして暖かいものとなったか

style_05

リビングの先は礼拝堂
八景の牧師、71歳。その職住・公私一体ライフスタイル



1階平面図

■所有車が原寸大で記された1F平面図。奥のポルシェは89年型911SS、横浜にはこれ1車、世界でも200車強のレアモデルである

「建築家は、単なるアーティストであつてはいけないが、クライアントのアーチプロデューサーであらねばならぬ」建築家・滝本学氏の持論である。芸術性や象徴性に拘泥するあまり、実用性を失うとむしろ本末転倒である。実用性に欠ける住宅は、快適性と、住む人のアミューズメントを阻害するから。

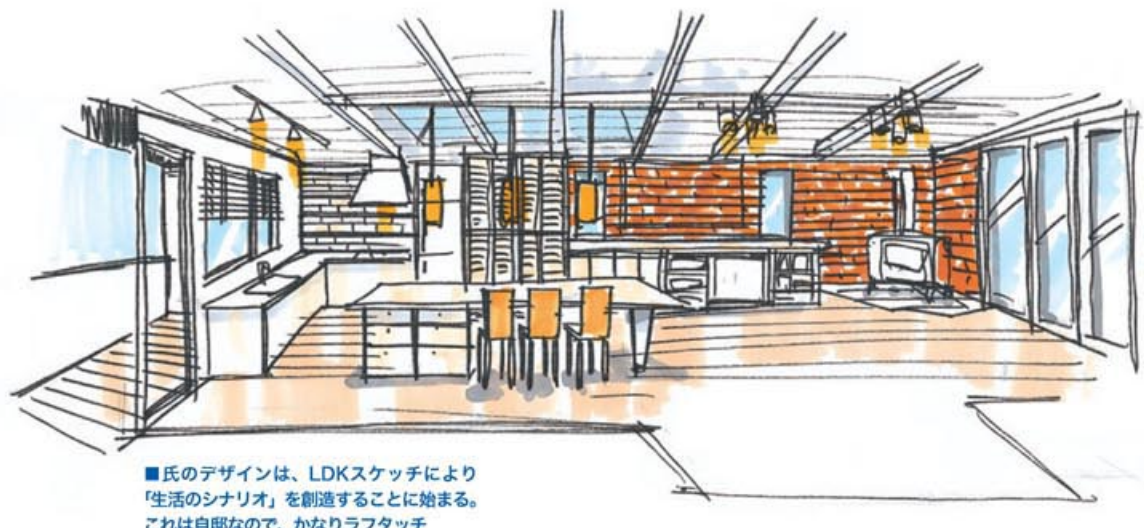
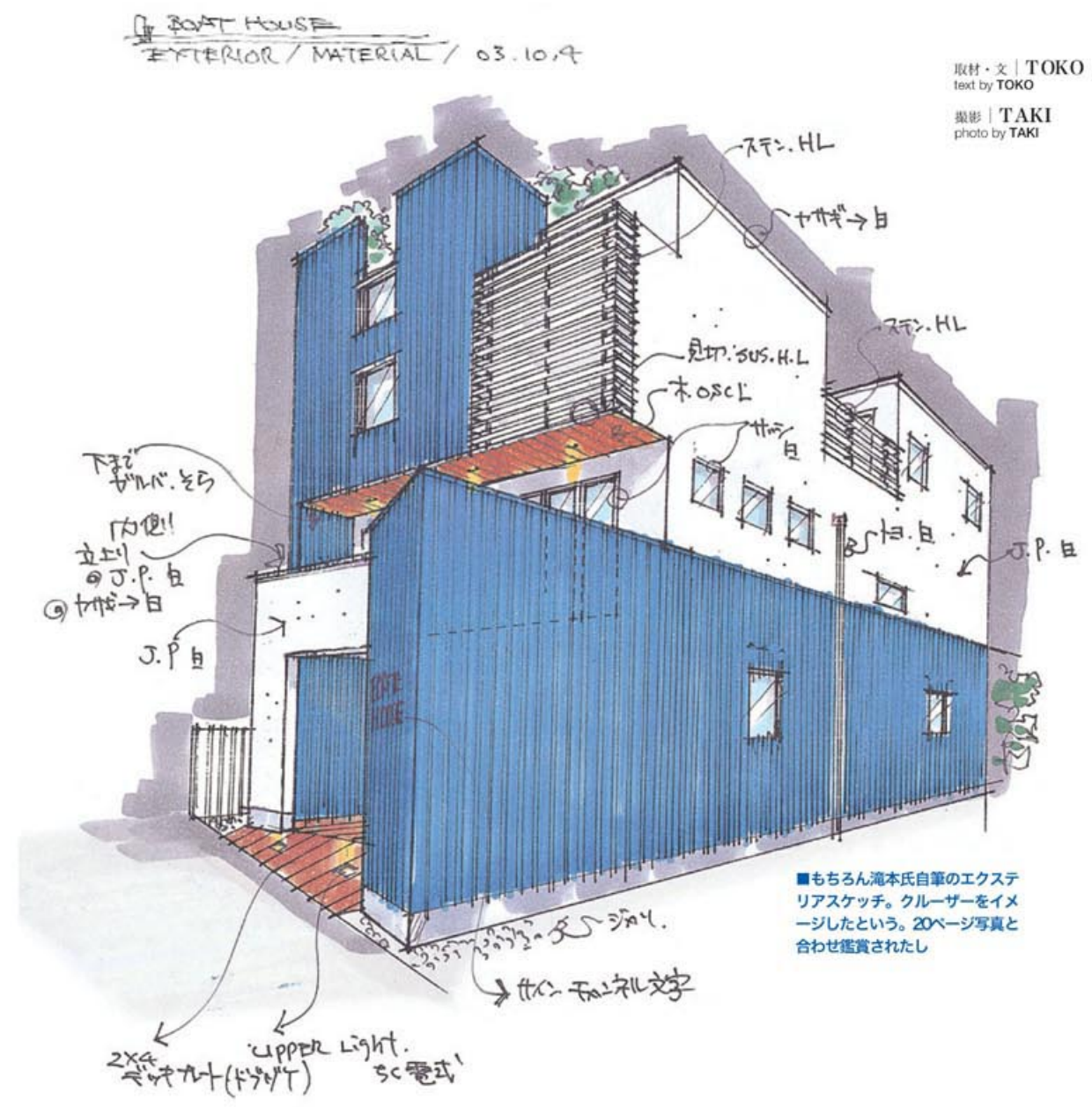
——アミューズメント。

ここでいうアミューズメントとは、滝本用語における、「生活を色っぽくする芸術・娯楽性」といった意味である。種々の制約や限られた予算のなかで、実用性を実現したうえで、いかに、クライアントが潜在的に持つアミューズメントを引き出し、高級で色っぽい住宅を実現するか。

それが住宅デザインにおける氏のテーマである。

「BOAT HOUSE」はテーマ実現のためのひとつのコンセプトであり、ここに紹介する物件——自邸という一作品——も同コンセプトに拠る。

では、「この自邸がなぜ「BOAT HOUSE」なのか？



住宅は、生活アミューズメント施設であるべきだ

■本牧の「BOAT HOUSE」、建築家・滝本学氏の自邸

「北米のボートハウスを持つ、豊かき、アミューズメント性、そのエッセンスをフリカケにして」日本の住宅を色っぽくする。
それが「BOAT HOUSE」コンセプト

(上) 強度、防水性が高いSE工法の副産物、屋上の「スカイリビング」。自動散水システムによる緑化も実現している
(下) ガレージはなくマルチルーム。クルマを出してピリヤードを置けばプレイルームに、書架とデスクなら書斎になる



米国で教育を受けた滝本が——それが氏の仕事を個人的にしている——インスパイアされたひとつの素材に、米国やカナダのボートハウスがある。波の影響を受けない、河口やラグーン、湖などの広い水辺に邸宅を構える。住宅には棧橋があり、友人のクルーザーや水上飛行機はそこに舫う。自邸は水辺をまたぐように建ち、自分の艇は屋内ハーバーに引きこむ。ハーバー脇には使い込まれた工具が揃うメンテナンススペースやカウンターバーなどちよつとした遊びのスペースがあり、そこから螺旋階段が上がってゆくとグレートルーム（リビング、ダイニングなど住宅のパブリックスペース）に出る。むろん日本ではボートハウスは非現実的だが、「そこにある濃縮されたコンセプト、豊かき、アミューズメント性をフリカケにして」日本の住宅を色っぽくする。それが「BOAT HOUSE」コンセプトである。娯楽性ばかりがアピールされがちだが、実は実用的でもある。ボートハウスは、



水際と、陸側の本来の玄関と、二つのエントランスを持つ。滝本邸の間口は壁の芯で58mしかないが、「BOAT HOUSE」コンセプトが、この間口で、人と車の動線をどう独立、確保するかという問いに解を与えている。ガレージのエントランスはいわば「男の勝手口」で、滝本氏の男友達も気軽に立ち寄り、一杯飲んで帰ってゆく。2階の玄関からグレートルームに通じれると「訪問」になって奥様に気を使ひもする。氏自身も、夜クルマで帰宅した際、すぐに上に上がらず、仕事モードの余韻をここで一杯飲むことでフエードアウトさせたりする。



■「BOAT HOUSE」コンセプトにより、人と車の動線が独立確保されている（玄関は右手階段を上った2階）

「BOAT HOUSE」は生活の局面を多様化するのだ。写真を見て、ああガレージハウスねと思つた向きもあるがそれは違う。「狭小住宅は、互いが互いの機能を侵食するようにデザインすることがコツ」と——滝本邸は敷地面積33坪、延床面積61坪で、いわゆる狭小ではないのだが——氏は言う。「クルマを意識しすぎてガレージを作つてしまうと、クルマを出したとき、空きガレージでしかなくなつてしまう」写真を参照、壁はレンガだし、床はコンクリートではない。クルマを出してピリヤードを置けばプレイルームになるし、書架なら書斎になる。



構造 木造在来軸組SE工法 (気密断熱)
 規模 地上三階建て (四階塔屋有り)
 敷地面積 110.73㎡ (33.49坪)
 建築面積 76.56㎡ (23.15坪)
 延床面積 202.75㎡ (61.33坪)
 設計・監理 滝デザイン研究所
 ☎045-663-0061 <http://www.t-dlg.jp>

レンガの間に漆喰を塗り、それを削ってクラシック感を出した。ルーフィングの間接照明は、対象を美しく浮かび上がらせるため。



できない者は単にドラフティングデザインナー (設計士) と称される。インテリアにこだわる氏は、建具を含めてデザインし、家具も含めたプレゼンをする人が多い。この自邸にも、自ら日本向けにプロデュースしたカーサ・イタリアや米国ベラ社の建具を使っている。

両側にバルコニーが配され風が抜けるLDKには、光が透過するドアのポリカーボネート、白木、アルミ、漆喰、レンガなど多種の素材が使われているが、不思議な統一感がある。予定調和なそれでも、モダンとかクラシックといったカテゴリーに括れるそれでもない。それが達人の職能だから、とすればそれまでなのだ。

完成したそれを壁と天井で囲み、内側と外側を摺り合わせてゆき、デザイン決定、図面に起こすのは最後になる。「シナリオスケッチ」は、図面や3DCGよりはるかに情報量、すなわちイメージ喚起力が高い。

クライアントのイメージそのものが実際に建つので、仕事も円滑でロスが少ない。

ちなみに欧米では「シナリオ」を描ける者がアーキテクト (建築家) と称され、それが

忘れていた。

横浜特集である。

建築家滝本学はなぜ、横浜に、事務所と自邸を構えているのか？

事務所の主要な仕事は、大手デベロップパーをクライアントとして、ホテルや集合住宅、店舗、リゾートなどのコンセプトメイク、デザインコンサルテーションを行うことである。

その事務所の仕事で海外に行くことも多いが、

「日本的なるものはかなりカッコ良く、それを海外に発信するのはそう遠い仕事ではないのでは」と実感する。

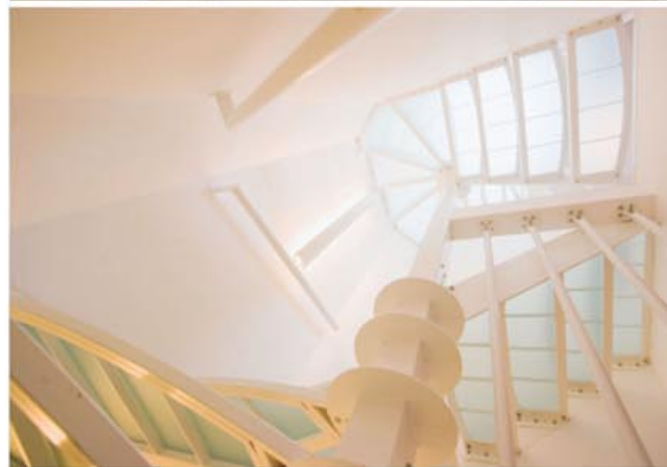
氏の短中期的目標は、住宅建築を含む住環境においてネオジャパニーズスタイルを確立し、それを、住宅建築や住環境先進国とされる欧州など海外に輸出することである。

そのとき「from JAPAN」は弱く、「from YOKOHAMA」は強く、と氏は言う。

「世界のどの街に行っても、帰って来るとやっぱり横浜、と思う。精神性みたいなものが高いいし、文化も都市的利便性も自然もあって、住み心地がいい」自邸の将来計画は？

「本牧のここは商業地域だから、子どもが独立したら、女房が店をやることもできるし。山手あたりの眺めのいい土地を探して、数寄屋造りの家を建てたらかっこいいかなとかね。

知ってます？ 数寄屋ついで前衛で、その時代のネオジャパニーズスタイルなんですよ。」



(上) 上質なリビングであり、ホテルのラウンジでもあるような「ケとハレ」が同居。透過光駆使は氏の得意技のひとつだ
 (右) 2階。左が仏間で正面が寝室。どこか中近東風の建具。実はホームセンターで見つけ (1枚1500円)、建具に加工した
 (左) 「BOAT HOUSE」を縦に貫く動線、螺旋階段。トップライトと光を透過するポリカーボネートの踏み板により、光の柱のよう

「クライアントのアーミューズメントがどこにあるのかを探るべく」

スケッチするのは間取りではない。朝はこういう光のなかで珈琲を飲み、夜はシアトリカルに光が暗転して落ち着きを与え、といった「生活のシナリオ」である。

「クライアントのアーミューズメントがどこにあるのかを探るべく」

スケッチするのは間取りではない。朝はこういう光のなかで珈琲を飲み、夜はシアトリカルに光が暗転して落ち着きを与え、といった「生活のシナリオ」である。

クライアントとディスカッションするとき、氏はまず、リビングのパースをスケッチする。クライアントのアーミューズメントがどこにあるのかを探り、「生活のシナリオ」を創るために

先述のとおり氏は80年代、アメリカ・オレゴン州ポートランドで建築を学んだ。欧米の建築教育は「内側」重視で、「60年代のジョージアンスタイルはこうだから猫足の家具はミスマッチで」といったふうに、インテリアの interior detail を徹底的に叩き込まれる。

手触り、居心地など、内側、インテリアから建築を構築してゆくことが身に付く。

そこで育った滝本氏である。ディスカッションに際し、クライアントに最後まで平面図を見せない。クライアントも平面的思考はできないため、平面図を見せると囚われすぎてイメージが膨らまない弊害があるからだ。

氏は、その場でグレートルームをフリーハンドでスケッチし、